闇落ちする悪役令嬢のはずでしたが
過保護な従者に溺愛されてます

ウィリアム
明るい王子。
第一王子だが、
王位継承権は
放棄している。
ルイス
ウィリアムの学友。
魔術師団長の
息子でもある。
セイラ
この世界を作った
クリエーターで、
ヒロインだと
自称する少女。
エイワス
シルヴィアの父。
娘にほとんど
関心がないようで……
アルファルド
シルヴィアに
真摯に仕える従者。
幼い頃、救ってくれた
彼女に身を捧げる。
シルヴィア
「完璧」と評される令嬢。
辺境伯である父に
認められたいと
努力しているが無視され続け、
心に孤独を抱えている。
Characters

一章　お嬢さまと破滅の未来

「お嬢さま、無理をなさっておいでではありませんか」
いつになく気遣わしげな声で従者のアルファルドに問われた時、シルヴィアは無意識にお気に入りのティーカップを掴(つか)む指に力を込めた。
自分は常に正しくあらねばならない。次期領主になるべく鍛錬(たんれん)を積む自分は、その立場を目指すにふさわしいと、ひとびとに証明し続ける必要がある。
そう、何度も自分を律してきた。
決して弱みを見せないよう細心の注意を払い、皆の目に適(かな)う自分を作り上げてきた。
おかげでようやく、領地経営の一部を父に任せてもらえるようにまでなった。
なのに、どうしてだろう。心に描く理想の自分を追い求めるほどに、時々どうしようもなく焦燥(しょうそう)感(かん)にかられて、息をするのも苦しくなる。
そういう時、胸の奥底にひそむなにかが、仄暗(ほのくら)くシルヴィアに囁(ささや)くのだ。
お前のあがきに、本当に価値はあるのだろうか、と。
（こんなことではダメね、アルファルドにまで心配をかけるなんて）

シルヴィアは首を振って、頭の中に響く声を強引に追い払った。
「そんなことはないわ。書類整理がひと息ついて、少し気が緩んでしまっただけ」
努めて明るく微笑んで、シルヴィアは芳醇なミルクティをそっと口に含ませた。
ふわりと鼻腔をくすぐる芳ばしさに、舌を包むまろやかな甘み。それらが張りつめた心をそっと解きほぐし、薄紅の唇から心からの賛辞の言葉が零れ落ちた。
「完璧よ、アル。あなたほど、おいしいミルクティを淹れるひとをほかに知らないわ」
少女の名は、シルヴィア・クロウリー。
ここ、ローゼン王国の北部国境を守護するクロウリー辺境伯の息女であり、王立学園きっての才女と名高い令嬢である。
腰のあたりまで揺れる長い髪は、つもりたての雪原を思わせる純白の色。透き通るような白い肌で、肌や髪と同じく色素の薄い睫毛に縁どられた瞳は、冬の澄み渡った空に似ている薄水色に輝いている。
けれども美しさだけを競うなら、従者のアルファルドも負けてはいない。
使用人の黒い仕着せをすらりと着こなす細身の長身に、ベージュがかった温かな色合いの金髪。切れ長の目元から覗くはちみつ色の甘い眼差しも、スッと通った高い鼻筋も、誰かが絵筆で描いたかのように完璧に整っている。
シルヴィアの賛辞に、アルファルドは柔らかく微笑んで胸に手を当てた。
「もったいなき、お言葉にございます。お嬢さまのお口にあいますよう、誠心誠意ご用意させていただきました」
「あなたがいなければ、私は今頃、倒れているわね」
「これはまた、過分なお褒めにございますね」
「少しも大袈裟ではないのだけれど」
実際、アルファルド――シルヴィアの二つ年上の彼が淹れてくれるミルクティは、彼女のささやかな癒しだ。
シルヴィアは十六歳で、昨年から全寮制の王立学園に通っている。
だが、今は学園の長期休暇中だ。
それでクロウリー辺境伯領に戻ってきており、その間、彼女は父の仕事を手伝わせてもらっている。
その疲れが伝わってしまったのか。アルファルドが物憂げに腕を組んだ。
「お嬢さまが倒れてしまわないかと、気がかりなのも事実です。昨晩も、遅くまで部屋の灯りが灯っていたようですし……」
彼が言うように、ここ最近は十分に睡眠を取れていない。日が昇る前から訴状と向き合い、昼間は文官たちと議論を重ね、夜は遅くまで書類を纏めている。
それでもシルヴィアは、苦笑をして首を横に振った。
「問題ないわ。私がお父さまにお願いして始めたことだし」
「ですが、日々追いつけないほど多くの仕事をお渡しになるなど……。旦那さまも意地が悪い。ま

るで、お嬢さまの覚悟を試されているようです」
「これしきのことで弱音を吐いていられないわ。私はお父さまの血を引く唯一の子供として、クロウリー辺境伯を継ぐことを目指しているのだもの」
母は早くに亡くなり、現当主である父の血を引くのはシルヴィア一人だ。
ローゼン王国では男子継承が主ではあるが、娘が家を継ぐことも可能である。
だからシルヴィアは、偉大な父を継いで辺境伯領の領主となるため、幼い頃から努力を重ねてきた。
無理難題と思えるような父からの指示も、自分に期待しているからこそのものであれば、喜んで無理ができただろう。
問題は、アルファルドが指摘したように、それが期待と思えないことだ。
どうやら父は、女であるシルヴィアを辺境伯にすることに不満があるらしい。
その証拠に、いつも彼はシルヴィアに冷ややかな眼差しを向ける。
お前は辺境伯にふさわしくない。
父の瞳はそうシルヴィアに告げているようで、見つめられるたびに彼女の心は重く沈んだ。
(……ダメね。せっかくアルが紅茶を淹れてくれたのに、これでは台なしだわ)
重い空気を払おうと、シルヴィアはもう一度ミルクティを味わおうとする。けれども口をつける直前、目の前にアルファルドが跪いたので驚いた。
「お嬢さま。今よりしばし、従者の分を超えますことをお許しください」

改まって告げられた言葉に、シルヴィアはきょとんと首を傾げる。
そもそもシルヴィアにアルファルドを縛る意思はない。彼自身が真面目なためそれを許さないが、本当はもっと砕けた態度で接してほしいくらいだ。
「もちろんよ。どうぞ？」
シルヴィアが促すと、アルファルドはひとつ深呼吸をした。それからはちみつ色の美しい双眼で、真剣にシルヴィアを見つめた。
「嘘偽りなき本心をお聞かせください。お嬢さまはかなり、とんでもなく、無理をなさっているはずです」
「え？」
「なにか胸に溜め込んではいませんか？　思い悩んではいませんか？　私で相談相手が務まるとは思えませんが、吐き出した思いを受け止めることならできます。あなたが抱える重荷を、どうか私にぶつけてください」
「えっと……」
シルヴィアは困惑した。
アルファルドの眼差しは大真面目である。
だけどシルヴィアには、彼が突然ここまで踏み込んできた理由がまるでわからない。
そもそも、大きくなってからはいつも澄ました顔をしていた彼が、こんなにも熱心に食い下がる姿をひさしぶりに見た。

（今日の私、そんなに疲れた顔をしているのかしら……）
戸惑うシルヴィアは、自分の白い頬に手を当てた。
自分は父に次期領主として認められていない。
その不安は常に頭の片隅にある。
逆に言うなら、悩み始めたのは昨日今日ではないし、突然、悩みが大きくなったわけでもない。
だから、アルファルドがこんなにも心配する理由が思い当たらないのだ。
なんだか申し訳なくなって、シルヴィアはしゅんと項垂れた。
「ごめんなさい。アルの質問に、上手く答えられないの」
「お嬢さまが謝る必要はございません！　……やはりあの女、適当なことを言っていただけなのか？　お嬢さまが悪魔にとり憑かれるなんて……いや、しかし。あの幻覚は、作り物にしては妙に手が込んでいたようにも……」
途中からよく聞こえなかった。
なにやらしかめ面で呟いているが、その難しい表情からは、むしろアルファルドこそ悩みごとがあるのでは、と疑ってしまう。
（そういえば今朝、アルファルドは街に出かけていたはずだわ。急用だと言っていたけれど……その時、街でなにかあったのかしら）
シルヴィアが首を傾げた時、アルファルドがぐいと身を乗り出した。
「では、なにかしてほしいことはございませんか」

「そんなこと、急に言われても……」
「お嬢さまはきっと、いえ、絶対に、我慢していることがおありのはずです」
ついに「絶対」とまで言われてしまった。
跪いて答えを待つアルファルドは、納得する回答を得られるまで梃子でも動きそうにない。途方に暮れつつ、シルヴィアは一生懸命考えた。
（アルファルドにしてほしいこと、してほしいこと……。ミルクティ……はもう淹れてもらったし、お菓子もさっきいただいたばかりだし。なにかあったかしら？）
がんばって、「お願い」を絞り出そうとする。
その脳裏に、ふと、なつかしい思い出がよぎった。
〝女の子は魔法の印を掲げて、おそろしい悪魔をやっつけました。ひとびとは悪魔をやっつけた女の子を称え、救世の子と呼びました。めでたし、めでたし〟
優しい声で歌うように絵本を読むのは、生前の母だ。
シルヴィアと同じ純白の髪を三つ編みにし、シルヴィア、そして若き日の父とソファに並んで座っている。
大好きな両親に挟まれて、シルヴィアは目をきらきらさせて母を見上げた。
〝もう一回！　もう一回、ご本読んで！〟
〝あらあら。シルヴィアは本当に救世の子の物語が好きね〟
〝もう三回目だぞ……。そうだ。次はお父さまが別のご本を読んであげよう〟

〝や！　お母さまがいいの！〟
ぎゅっとシルヴィアが母に抱き着くと、父はわずかに眉を下げた。それにくすくすと笑いながら、母はシルヴィアを膝に抱き上げてくれた。
〝そんな顔をしないで。シルヴィアはちゃんとお父さまのことも大好きよ〟
〝本当だろうか……〟
〝あなたが緊張しているのが、シルヴィアにも伝わってしまうのよ。ね、シルヴィア。お父さまにも抱っこしてもらいましょう？〟
〝……うん〟
シルヴィアは小さく頷いて、父の膝によじ登る。父は恐る恐るシルヴィアの背を支えると、ぎこちなく微笑みながら頭を撫でてくれた――
（……あの頃は、お父さまと普通にお話しできていたわ）
遠い日の甘い思い出に、シルヴィアの胸が切なく疼いた。
母が亡くなってから、父と話すことはぐっと減った。
父はもとから表情の乏しい人ではあったけれど、シルヴィアに笑みを見せてくれることもなくなった。
圧倒的な魔力量で古代竜をも従え、明晰な頭脳で王国随一の要所を堅く守り抜き、名領主と称えられる父はシルヴィアの憧れであり目標だ。
父の隣に立ち、いつかは越えたいと心から願っている。

だから、いつの頃からか遠くに感じるようになった父を、恨みはしない。
だけど、もし。
少しだけ自分に素直になって、わがままを言えるなら。
「……頭を、撫でてほしいわ」
「はい？」
返事があって、シルヴィアははっと我に返った。
慌てて前を見ると、驚いたような顔でアルファルドがこちらを見つめている。それで声に出していたことに気付き、シルヴィアは青ざめた。
（私ったら、なんてことを！）
アルファルドはシルヴィアが彼に頭を撫でるよう懇願したと勘違いしただろう。
主従の権威を振りかざし、従者にそんなことを強いるなんて、はしたない女だと呆れたに違いない。
恥ずかしさと申し訳なさで、シルヴィアはおおいに慌てて弁明した。
「違うの、アルファルド。今のは決して、あなたへの答えではなくて……」
けれども、慌てる彼女をよそに、アルファルドは静かに立ち上がる。
これまでとは逆にアルファルドを見上げる形となり、シルヴィアはどきりとした。彼の甘いはちみつ色の眼差しに、うっかり溺れてしまいそうになる。
アルファルドはなぜかシルヴィアの肩を引き、そっと抱き寄せた。

「――こう、でしょうか？」
頭の上から、落ち着いた声が降ってくる。次いで、抱き寄せられたシルヴィアの頭を、アルファルドの大きな手が優しく撫でた。
（う、うそ……）
恥じらうよりも、シルヴィアはびっくりした。それ以上に、全身を駆け巡る眩暈がするほどの多幸感に、なにが起きたのかと驚愕した。
誰かに抱き寄せられるなんて、いつぶりだろう。
最後に誰かに頭を撫でてもらったのは、一体いつのことだっただろう。
だけど。
そんなことより。
（誰かに頭を撫でてもらうことが、こんなに幸せな気持ちになるなんて……）
今しがたまで悩んだり落ち込んでいたりしたのが嘘のように、強張っていた体から力が抜けていく。
あんなに胸に巣くっていた焦燥感も、暗く囁くあの声も、まるで雲になってふわふわと飛んでいってしまったような軽やかさだ。
このまま眠ってしまいたい。
頭を撫でる手から伝わる甘い誘惑にシルヴィアがうっとりと嘆息した時、アルファルドがすっと離れた。

「失礼いたしました。身を預けていただいたほうが頭を撫でやすいかと、つい……」
「あ、ううん……」
一瞬、物足りなさを覚えた後で、シルヴィアは動揺した。
なんてことだ。十六歳にもなって、無防備に異性に身を委ねてしまった。貴族の淑女としてあるまじき行為だ。アルファルドにも、申し訳ないことをした。
そう、自分を戒めなくてはいけないのに。
（こんな……。もっと、頭を撫でてもらいたいなんて）
自分を恥じ入るほど、頬に熱がのぼり、胸を占める甘い疼きが大きくなる。
ついさっきまでの彼女は、次期クロウリー辺境伯にふさわしいと誰もが認めるだろう、非の打ち所がない完璧な令嬢だった。
そんなシルヴィアが甘やかされる快感に目覚めた瞬間である。

＊　＊　＊

シルヴィアが自分の隠れた欲求に気付いてしまった、一日前――
クロウリー家の使用人にしてシルヴィアの従者、アルファルド・クロイツは、屋敷の窓から外を見下ろして整った顔をしかめた。
（やはり、いる）

およそシルヴィアに向ける甘い眼差しからは想像できない剣呑な表情で、遠く――広い庭園を挟んだ反対側の門をじっと睨む。
魔法で強化した瞳は、石の塀に隠れる小柄な人影を捉えていた。
アルファルドがそれに気付いたのは、小一時間ほど前だ。
敬愛する主人であるシルヴィアの休憩のため茶菓子とミルクティを運ぼうとしていた時に、どこかからこちらを窺う微かな気配を察知したのが発端だ。
（悪意や敵意を感じられなかったから様子を見たが、これほど長く留まるとは、明確な意図があって屋敷を観察しているに違いない）
クロウリー家に害を為すということは、シルヴィアの敵ということだ。アルファルドが動くのに、それ以上の理由はいらない。
幸いにしてシルヴィアのティータイムを終えた後で、憂いはなにもない。
アルファルドはそっと窓を離れると、あえて遠回りな使用人用の戸から外に出る。
シルヴィアの手を取った十二歳の時から、彼女に仕えるにふさわしい従者となるべく鍛錬してきた彼だ。敵に気取られないよう、気配を消して行動することなど造作もないことである。
音もなく庭園を回り、黒の仕着せの裾を翻してひらりと石の塀を飛び越えた。
「なにかご用件ですか？」
アルファルドが降りたのは、窓から見えていた怪しい人物のちょうど背後だ。
突如、真後ろから声をかけられた相手は、「きゃあ！」と飛び上がって悲鳴をあげた。

（女、か？）
遠目に子供かもしれないと思ったが、声は若い娘のようだ。
依然として顔はわからない。重苦しいフードを頭にすっぽりかぶっているためだ。
近づいて確信したが、やはりこの人物から殺気は感じられない。それどころか全身隙だらけで、これでは物盗りすらできないだろう。
（わざわざ出てくるまでもなかったか）
だが、たとえこの女が無害でも、彼女を雇って屋敷を探らせた誰かがいるかもしれない。自分がなにに加担させられているかも理解せず、金欲しさにのこのこと危うい仕事を引き受ける阿呆は存在するのだ。
やれやれ。少し脅かして吐き出させるか。
そう、アルファルドが白手袋を直しつつ近づこうとした時、フードの女が呟いた。
「……まさか、アルファルド？」
「……は？」
正体不明の相手から自分の名前が飛び出し、思わずアルファルドは足を止める。その間も女は興奮したように続けた。
「ファルたんだ、本物だ！　やっぱり、この世界に存在したんだ！」
一度下げた女への警戒が、アルファルドの中で一気に跳ね上がる。
先ほどまで張り付けていた笑みを捨て去り、彼は目の前の人物に吐き捨てた。

「貴様は誰だ。何の用でここにいる？」
「う、うぇ!?」
「正直に答えろ。でなければ、この場で貴様を消す」
顔の前に掲げた手に、細い紫電が走る。
シルヴィアほどの魔法の才には恵まれなかったアルファルドだが、主人を守るのに役立つ魔法は意識して強化している。電撃を鞭のようにしならせ、不届者を拘束して意識を奪う魔法は、わりと得意だ。
フードの女は慌てて、両手を前に突き出してぶんぶんと首を横に振った。
「ま、待ってください！　わ、私は決して、怪しい者じゃありません！」
「胸にやましい思いがない者は、そのような自己紹介をしないものだ」
「私はただ、シルシルがこの世界にいるか、確かめたかっただけで……」
「シルシル……？　貴様、やはりシルヴィアお嬢さまが狙いか！」
「か、考えられる限り、最悪の伝わり方をしてる！」
「やましいことがないなら、今そこでフードを取ってみろ。顔も見せられない相手の言葉を信じるほど、俺は甘くはない」
アルファルドが言い放つと、相手はぴたりと動きを止めた。……かと思えば、ローブをくるりと翻して脱兎のごとく逃げ出す。
切れ長の目を吊り上げて、アルファルドは右手を振るった。

「貴様！　舐められたものだな、『雷縛』！」
ばちりと閃光が走り、アルファルドの手から紫電の鞭が飛び出す。
雷の鞭はうねりをあげて、逃げるフードの女に勢い良く迫った。
しかし、鞭が絡みつこうとした刹那、振り向いた女が両手を掲げる。
「『防御』！」
女が叫ぶのと同時に、彼女の手のひらの先に小さな魔法壁が展開され、アルファルドの『雷縛』を弾いた。
（この近距離で正確に防御壁を展開した!?　この女、貴族の関係者か？）
一般的に、庶民より貴族のほうが魔法の扱いに優れる者が多い。環境に恵まれ、幼い頃から魔法の訓練を受けるためだ。
声の感じから、フードの女は自分と同年代だ。その年で、主人の付き添いとはいえ一応は王立学園の生徒であるアルファルドの魔法を弾くということは、彼女もそこそこの魔法の使い手――つまり貴族関係者である可能性が高い。
一瞬、驚きに虚をつかれたアルファルドだが、フードの女が再び走り出したのを見て我に返った。
「ああ!?　待て！　逃がすか！」
再びアルファルドは『雷縛』を放とうとする。
けれどもその瞬間、突如として頭に、うずくまるシルヴィアの幻覚が電撃のように一瞬にして駆け抜けた。

〝私に、価値なんてない〟
〝私に、辺境伯を継ぐ資格なんてない！〟
〝全部全部、無駄だった〟
〝全部全部、意味がなかった！〟
〝……力が欲しい〟
〝力が欲しい！〟
〝私の価値がゆるがない、私の価値を誰も疑わない、そんな力があれば……！〟
「なんだ、これは……」
よろめいたアルファルドは、石壁に手をついて浅く呼吸をした。
頭の中を駆け抜けた光景の中、シルヴィアはひとり暗闇の中で泣き叫んでいた。うちひしがれ、己の無力さに深く失望し、激しく怒っていた。
そんな彼女が手を伸ばした先にいた禍々しいアレは……
「お嬢さま!!」
シルヴィアが危ない。
そう判断したアルファルドは、女を追いかけるのをやめて全速力で屋敷に戻った。そのまま、ノックもせずに主人が執務を行う際に使う書斎に勢い良く飛び込んだ。
そこにいたのは、執務官と話すのを中断してびっくりしたようにアルファルドを見るシルヴィアだった。

「どうしたの？　なにかあったの、アルファルド？」
肩で息をしながら、アルファルドも逆に問いかけた。
「お嬢さまこそ、なんともないのですか？」
「魔力障壁のシミュレーションが上手く計算できなくて困ってはいたけど……。アルが血相を変えて飛び込んでくるような事件は起きていないわ」
「なら、さっきの光景は……？」
アルファルドが困惑して呟くと、不思議そうにしつつもシルヴィアが近寄ってきた。そして、白い手を伸ばしてぴとりと彼の額に触れた。
「……熱くはないわ」
「お嬢さま。私は体調を崩したのではありません」
「じゃあ、悪い夢を見たのかしら」
「昼寝をして寝ぼけたのでもありません。何ともありませんから、私の顔をぺたぺたといじくり回すのはおやめなさい」
薄水色の美しい瞳できょとんとアルファルドを見つめながら、従者になにか異常がないかと、シルヴィアが彼の顔のあちこちに触れる。
それを諌めつつ、アルファルドは切れ長の目を深刻に細めた。
（あの女が逃げるためにあんな幻覚を俺に見せたのか？）
あの光景が頭に流れ込んできたのは、女がアルファルドの魔法を弾いた直後だ。

対象の意識を逸らすため、その者が最も大事に思う人間が危機に瀕する幻覚を見せる。聞いたことはないが、そういう魔法を女が使ったのかもしれない。
だけど、それにしてはあの幻覚は婉曲的だった。
一方で、不穏でもあった。
幻覚の中、シルヴィアはなにかに手を伸ばしていた。
深く、暗く、汚泥のように澱み、シルヴィアを誘惑するように邪悪に渦巻くもの。
その中から這い出てきたのは、まるで伝承に聞く悪魔そのものだった。
「……いずれにせよ、あの女に話を聞く必要があるな」
無礼を詫びて書斎を辞してから、アルファルドはそう固く決意した。

怪しい女が城塞都市アリストレにあるクロウリー家の屋敷前から消えた、翌朝。
大通りをはずれ、曲がりくねった細道を行った先にある小さな宿から、一人の小柄な少女がこそこそと出てきた。
歳は十五、六歳ほど。肩の上で揺れるストロベリーブロンドの髪をフードで隠し、くりりと大きな栗色の瞳できょろきょろと怯えるように周囲を窺っている。
少女はひとしきりあたりを確認すると、ほっとしたように胸を撫で下ろした。
「さすがのファルたんも、一晩で宿屋の特定はできないか……」
「そのファルたんというのは、俺のことですか？」

当たり前のように背後から囁かれ、少女は「うぎゃあ!?」と悲鳴をあげた。
弾かれたように振り返る少女を、アルファルドは胸に手を当てて迎える。
少女は口をわなわなさせて、彼を指差した。
「フフフファルたん!?　な、なんでこんなところにいるの!?」
「俺がこの街に、いくつ『目』を飼っていると思っている？　素人一人、潜伏場所を暴くなど造作もない」
笑みを消してアルファルドが言い放つと、少女は「ひぃぃぃ！」と震え上がった。
昨日のように逃げられたらかなわない。
少女が震えているうちに、アルファルドは長い足で「だん！」と壁を蹴り、少女の逃げ道を絶った。それから改めて、ぐいと長身を屈めて少女を覗き込んだ。
「答えろ。あの幻覚は何だ。なぜ、あんなものを俺に見せた？」
「だ、だから！　私はシルシルの敵とかじゃなくて……ん？　幻覚？」
「惚けるな！　あんな紛い物を……お嬢さまが悪魔と契約し、魔人に堕ちるなど！　あんなものを俺に見せるとは、よほど命が惜しくないものと見える」
こめかみに青筋を浮かべて吐き捨てたアルファルドだが、女は目を丸くした。
「なんでファルたんが、『まほきゅう』のシルシルの未来を……？　まさか、ファルたんの魔法を弾いた時に、私の記憶がファルたんに流れちゃった……？」
「なにをぶつぶつ言っている。説明するつもりがないというなら……」

「……で、でも。これって、ある意味ですごいチャンスなのかも……！」
意を決したように女が顔を上げた。栗色の大きな瞳で真剣に見上げられて、思わずアルファルドは口をつぐむ。
少女はアルファルドを見つめたまま、こう宣言した。
「ファルたん、ううん、アルファルドさん。シルヴィアさまのことで、大事な話があります！」

――その数分後。
アルファルドは少女と宿屋の一階の食堂で向かい合って座っていた。
席に着く時、少女はフードを脱いで肩にかかるストロベリーブロンドの髪を露わにした。そうしてひと息ついてから、自身の胸に手を当てて口火を切った。
「私はセイラ。ストラ地方のアルカ村から来ました」
アルファルドは驚いた。
ストラ地方というと、アリストレから馬車で十日ほどかかる。飛竜を飛ばせば三日もあれば着くが、どのみち遠い場所には違いない。
彼女を無事に捕まえられたことでいくらか落ち着きを取り戻したアルファルドは、ひらりと手を振って先を促した。
「確か昨日、シルヴィアお嬢さまが実在するか確かめに来たと言っていましたね。そんな遠くから、それだけのために来たのですか？」

「私、別の世界からの転生者なんです」
「……はい？」
いきなり突拍子もない方向に話が飛び、さすがのアルファルドも耳を疑う。
思わず不審者を見る目をしてしまった彼に、セイラは大慌てした。
「う、ううう嘘じゃないんです！　証明は、できないですけど……」
「とりあえず聞きましょう。続けてください」
「う、うう。アルファルドさんの視線が痛い……。前の人生で私は、シナリオライターをしていました。あ、シナリオライターっていうのは、劇作家みたいなものなんですけど。その時に手がけた『まほきゅう』、――『魔法使いと救世の乙女』というゲームの舞台が、ローゼン王国にそっくりで……」
「お嬢さまがその登場人物だったと？」
「……はい」
消え入るような声で肯定したセイラに、いよいよアルファルドは頭痛がしてきた。
これまでの言動から察するに、おそらく自分も彼女の物語の登場人物なのだろう。――もちろん、セイラが正気ならば、だが。
（このまま、治療院にでもぶち込むべきか？）
一番近い治療院への道のりを思い浮かべて、アルファルドは悩んだ。
妄想にとり憑かれて遠路はるばるやってきたのだとしたら、もはや怖い。下手な不審者よりも危

険ですらある。
だが、単なる妄想として切り捨てられないのも確かだ。
なにせ、もし彼女の言葉が真実ならば……
「その物語――ゲームの中で、お嬢さまが悪魔に魅入られ体を奪われてしまう。それが、私が見た幻覚の正体だと？」
「……シルシルの最期は、私が最も後悔したシーンなんです」
アルファルドの不安を裏付けるように、セイラは表情を曇らせて俯いた。
「私は本来、ハピエン主義……すべてのキャラクターに幸せになってほしい質なんです。だから、シルシル――シルヴィアも幸せにしてあげたかった。だけど、それじゃ物語として弱い。主人公を成長させると同時に、プレイヤーを物語に没入させる転換点が必要だった。だからって、私は……」
悔しげにぎゅっと手を握りしめてから、彼女はアルファルドに頭を下げた。
「お願いです、アルファルドさん。今度こそシルヴィアを幸せにしたい。あの子を悲しい運命から救ってあげたい！　そのために、あなたの力が必要なんです！」
（あの女に思わず呑まれて、野放しにしてきてしまった……）
その日の午後。
シルヴィアのためのティーセットを準備しながら、アルファルドは頭を悩ませた。
セイラの話は現実味がなさすぎて、とてもじゃないが信じられない。

といって、冗談として忘れるには重すぎる。
内容が内容だけに誰にも相談できず、厄介としか言いようがない代物だ。
しかもだ。具体的にどうすればいいのかと問えば、わからないときた。
〝前世の記憶があるといっても、思い出せたのは断片的なことばかりで……。なんでシルシル、シルヴィアさまが悪魔に魅入られちゃったか、全然わかんないんです〟
そう言ってセイラがへらりと笑った時、冗談抜きにアルファルドは手元の木製のマグカップを叩き割りたくなった。
（使えない。使えなすぎるぞ、あの女！）
思い出した途端、怒りが蘇ってきて、深呼吸をして自分を宥める。
実質的に自らを創造主だと言っておきながら、セイラは細かいことはさっぱり覚えていないらしい。
それでもアルファルドがぎりぎりその言葉に耳を貸す気になったのは、彼女を誠実な人間だと感じたからだ。
〝ずっと気になっていたのだが、俺を無理に名前で呼ぶ必要はない。慣れた呼称で好きに呼べ〟
別れ際、アルファルドはセイラにそう告げた。
妄想であれ、真実であれ。セイラにとってアルファルドは彼女が産み出したキャラクターであり、「ファルたん」なのだ。その認識を無理に曲げさせる必要はない。
けれども、セイラはしばし瞬きをした後で微笑んで首を横に振った。

〝ありがたいけれど、やめておきます。私は『まほきゅう』の産みの親だけど、この世界は動いていて、みんな生きた人間です。だから私は、この世界で出会ったひとたちを、一から知っていきたいって思うんです〟
そのまっすぐな言葉に、不覚にもアルファルドは感心した。
少なくとも、この人間は嘘は言わない。そう信じさせるには十分だった。
直後、「というわけで……。よろしくお願いします、ファル君」と照れ笑いと共に手を差し出された時は、結局別の愛称を作るのかと突っ込みたくなったが。
何にせよ、アルファルドはセイラの申し出を受けてしまった。
〝具体的なことは思い出せないですが、シルヴィアさまには実は、みんなに隠している大きな悩みがあります。それが膨れ上がって、悪魔と契約を結んでしまうんです〟
セイラはそう説明したうえで、人差し指を立てて方針を打ち立てた。
〝私はなんとか記憶を思い出して、シルヴィアさまの未来を変える方法を考えます。ファル君はシルヴィアさまの悩みを探りながら、彼女を支えてあげてください〟
――だからというわけではないが、アルファルドはその日のティータイム、シルヴィアにいつになく食い下がってみることにした。
「なにか胸に溜め込んではいませんか？　思い悩んではいませんか？　私で相談相手が務まるとは思えませんが、吐き出した想いを受け止めることならできます。あなたが抱える重荷を、どうか私にぶつけてください」

問われたシルヴィアが困ったように眉を八の字にする。
彼女の心をいたずらに煩わせるのは本望ではない。だが、シルヴィアを追い詰めかねない悩みごとに、思い当たるものがあるのも事実だ。
（お嬢さまの悩み。それは爵位の継承の件と、おそらくは旦那さまとの関係だ）
クロウリー辺境伯。
それは、ローゼン王国で王家、公爵家に次いで力がある由緒正しい貴族の家だ。代々、魔力の強い家系であり、特に現当主でありシルヴィアの父エイワス・クロウリーは、国境のガルド山脈に住む古代竜すら跪かせる大魔法使いとして知られている。
シルヴィアはエイワスのたった一人の子だ。しかもローゼン王国は男系継承が圧倒的に多い。
そのため、次期クロウリー辺境伯の座を狙う数多の分家が、エイワスに自家の女を後妻として宛がおうとしたり養子を勧めたりの打診が絶えない。
つまりシルヴィアは、クロウリー家当主の正統な後継者でありながら、常にその地位を脅かされてきた。
気丈な彼女は素晴らしい才能と血の滲む努力によって、自らが次期当主としてふさわしい器だと証明し続けてきた。
（なのに旦那さまは、お嬢さまこそが自分の後継者だと一向に公言してくださらない。そのせいで、お嬢さまが苦しまれているんだ）
アルファルドにエイワスの意図はわからない。

なにか考えがあるのだろうが、そのせいでシルヴィアが苦しんでいると思うと、はらわたが煮え繰りかえりそうだ。
自分が彼女の苦しみを取り払うのだ。
その一心で、彼はシルヴィアの答えを待った。
だが、「頭を撫でてほしい」と言われた時は、いささか驚いた。
（そういう意味でお聞きしたのではなかったが……）
うるさい外戚共に手を回して黙らせるだとか、エイワスに彼女を次期当主に指名させるだとか、そういう答えを予想していた。
だが、シルヴィアのお願いを無下にするという選択肢は、アルファルドにはない。
立ち上がった彼は、躊躇なくシルヴィアを抱き寄せ、その頭を撫でた。
「こう、でしょうか？」
自信はなかった。
誰かに頭を撫でられる感覚を、アルファルドはすっかり忘れてしまっていた。
シルヴィアに拾われる前――クロイツ家にいた頃の彼は、三歳から十歳までの間に発現する魔法の才能の目覚めが一向に訪れず、「クロイツ家に泥を塗る落ちこぼれ」として虐げられていたからだ。
（弟たちが母親に撫でられているのを遠目に見ていたが……力加減はこれくらいでいいだろうか？）
シルヴィアは華奢だし、肌は柔らかくて髪も絹のように細い。力加減を誤り、彼女を傷つけてし

まわないかとヒヤヒヤした。
けれども次第に、アルファルドは自分がとてつもない過ちをしたことに気付く。
（お嬢さまのお願いは、『頭を撫でて』だけだ。そのために抱き寄せたのはやりすぎではないか？）
血縁上の母親が弟たちを撫でる時、膝に乗せて抱いていた記憶がある。だから、とっさに似たようなことをしてしまったが、頭を撫でるだけなら抱き寄せる必要はない。むしろ、従者が主人に必要以上に触れるなどあってはならないことだ。
慌ててシルヴィアから体を離して、アルファルドは無礼を詫びた。
「失礼いたしました。身を預けていただいたほうが頭を撫でやすいかと、つい……」
「あ、ううん……」
こちらを見ないシルヴィアに、アルファルドは自分を殴りたくなった。
なんてことだ。彼女を救うどころか、今すぐにクビになってもおかしくない失態を犯してしまった。
（だが、今、お嬢さまのそばを離れるわけにはいかない！　何とお嬢さまにお詫びをするべきか……）
アルファルドは必死に考えを巡らせた。
――否。巡らせようとした。
そこで、シルヴィアの様子がおかしいことに気付く。
（これは……怒っておられるわけではないのか？）

よく見ると、彼女の耳が赤い。
考えてみれば当然だ。シルヴィアは十六歳の淑女で、自分は十八の男だ。
令嬢らしく男慣れしていない少女が、歳の近い異性の腕に抱かれたら、従者相手とはいえ恥じらいを覚えるだろう。
（それどころか、無理やり男に抱かれて、恐怖させてしまったのではないか!?）
最悪を考えて、アルファルドは青ざめた。
だとしたら、今後の進退を気にしている場合ではない。そこの窓から飛び降りても謝罪に足りないほどだ。
「お嬢さま！　俺はなんということを……！」
動揺して、アルファルドはその場に跪こうとする。だけど彼が身を屈める前に、シルヴィアがこちらを見ないまま小さく声をあげた。
「あのね、アルファルド」
「はい、お嬢さま」
ぴたりと動きを止め、判決を待つ大罪人のような心地で主の沙汰を待つアルファルドに、シルヴィアが震える声で続けた。
「本当に。ほんとに、ほんとに、ほんとに。アルファルドが絶対、これっぽっちも嫌じゃなかったらの、お願いなのだけれど」
「……はい、お嬢さま」

背筋に冷や汗が伝い、アルファルドはごくりと無意識に息を呑み込んだ。
永遠のような一瞬の後、シルヴィアがもじもじとお願いした。
「時々でいいから、今みたいに、頭を撫でてもらえない……？」
「……え？」
今度こそ本当に、アルファルドは自分の耳がバカになったのかと思った。もし耳が正常なら、頭に異常をきたしたのだ。
それくらい、都合のいい幻聴を聞いた気がする。
アルファルドはまじまじと、シルヴィアを見下ろす。
それで、目が合ってしまった。
「ダメ、かしら？」
こちらを見上げるその顔は、羞恥のためか真っ赤に染まっていた。薄水色の美しい瞳も、心なしか涙に潤んでいる。
いつもは高貴で完璧な令嬢であるシルヴィアの、恥じらいに染まった上目遣い。
それを真っ向から浴びたアルファルドは、一拍遅れてぶわりと全身を熱が駆け巡る心地がした。
（な、な、何だ。この、胸が締め付けられるような苦しさは……！）
ぎゅうという胸の痛みに、アルファルドは呼吸の仕方すら一瞬わからなくなる。どうにか息を吸って吐いて動揺を抑え込みながら、なんとか頷いた。
「え、ええ。私ごときでよろしければ、喜んで撫でてさしあげます」

「本当!?」
アルファルドの答えを聞くと、シルヴィアはぱっと表情を明るくして顔を上げた。その無邪気な仕草に、再び息が苦しくなる。
断られなかった安堵のためか。それとも、アルファルドが「嫌じゃなかった」とわかったためか。おそらく、後者だ。
アルファルドは、シルヴィアがそういう、相手の気持ちを慮れる優しい少女だと知っている。
とにかくシルヴィアは、ほっとしたように呟いた。
「……よかった。嬉しい」
ずぎゅんと。今度は、心臓を雷で射貫かれたような衝撃があった。
アルファルドは胸を押さえて呻く。
「うぐぅ……！」
「アル？　どうしたの、大丈夫？」
「……失礼いたしました。目の前に広がる世界の素晴らしさに対し、心臓の強度が足りていなかったようです」
「そう……？　無理しないでね」
不思議そうにシルヴィアは首を傾げる。
その向かいで、アルファルドは深く長く吐息を漏らした。
危なかった。

従者として己を律してきたから耐えられた。
もし自分が従者でなかったら、シルヴィアの天界級の愛らしさに消しクズになって消えていたかもしれない。
それにしても、まずいことになった。
シルヴィアの願いに応えるのはアルファルドの本望だ。彼女を悲惨な運命から救うためにも、彼女の憂いを晴らす助けになることは何でもするつもりだ。
だけど、彼女を少し甘やかしただけで、あんなに可愛らしい反応が見られるなら。
（お嬢さまを……シルヴィアさまを甘やかすのが、クセになってしまいそうだ）
言葉には出さず、アルファルドは熱くなる頬を手で隠したのだった。

＊　＊　＊

長期休暇も残すところ七日となった。
始業式に遅れないよう余裕をもって明日には屋敷を発つため、今日はシルヴィアがアリストレで過ごす最後の夜だ。
（お父さまともしばらくお会いしないわね）
侍女に髪を結ってもらいながら、シルヴィアは窓の外の青々とした木々を眺めつつ内心そう呟いた。

長期休暇の間、当主エイワスはシルヴィアに日々の細かい政務を任せ、領内視察で各地を巡っていた。
けれども娘が学園に戻るので、昨晩遅くに屋敷に戻ってきている。
なので今晩は、エイワスと夕食を共に取る予定だ。
尊敬する父ではあるが、緊張もあり少しばかり気が重い。
「はい、できました。完璧です！」
シルヴィアの髪を結っていた侍女・ロザリーが、パンッと満足げに手を叩く。それで、シルヴィアは正面の鏡に視線を戻した。
今日の髪型のテーマは『夏』のようだ。普段はおろしている純白の髪が、ロザリーの手によって繊細に編み込まれ、くるりとすっきり纏められている。アクセントとして結ばれた水色のリボンが、ヒラヒラと揺れて可愛らしい。
「ありがとう。とっても素敵ね」
「お嬢さまが学園に戻ったら、こうして髪を結ってさしあげられないですからね。今日は特に気合を入れて、おめかしさせていただきました」
シルヴィアが褒めると、ロザリーはえへんと胸を張る。
ロザリーはアルファルドよりも年上のはずだが、童顔のせいでシルヴィアより年下に見える。ロザリーには内緒だが、妹がいたらこんな感じだろうかと、シルヴィアは時々思う。
鏡越しに、シルヴィアは微笑んだ。

「ロザリーともしばらくお別れと思うと、寂しくなるわ」
「本当ですよ！　学園がずっとお休みか、私もアルファルドさんみたいに学園にご一緒できたら良かったのに！」
貴族の子女の自立を促す意味もあり、王立学園は侍女や従者を伴っての入寮を認めていない。そのルールは、たとえ王族であっても同じだ。
そんな中、アルファルドがなぜ学園についていけるのかというと、彼も王立学園の生徒だからだ。
遅咲きではあったが、アルファルドの魔力は学園の規定値を満たしており、エイワスの口添えで入学した。
例外的に二年遅れでシルヴィアと同学年であるものの、従者ではなく学友としてそばにいるのなら問題ない。
（アルとは、これからも毎日、学園でも会える……）
改めてそう考え、シルヴィアは頭の中心がぽやぽやと和むのを感じた。
最近、なぜか彼のことを考えると、シルヴィアはふわふわした心地に囚われてしまう。
彼女はぱたぱたと手で顔を扇いだ。
そんなシルヴィアをよそに、ロザリーは無邪気にシルヴィアの膝の上を覗き込む。
「そういえば、そのご本は読み終わったのですか？」
「あ、ええ。とても勉強になったわ」
ちょうど髪を結ってもらっている間に読み終わった分厚い書籍を膝の上に立てて、シルヴィアは

目を輝かせた。
勉強熱心な彼女にしては珍しく、魔法理論や領地経営に関する書物ではない。書斎の隅にあった、魔法医学の専門書だ。
「あのね、ロザリー。信頼する他者とスキンシップをする時、私たちの体の中にはオキシトシンという魔力成分が生まれるのですって」
「へえ。初めて聞きました」
「オキシトシンは『幸せ魔力』とも呼ばれているの。それが体に満ちると、不安や恐れのかわりに安らぎを得られるらしいわ」
嬉々として、シルヴィアは本から得た知識を披露する。
なぜ、アルファルドに頭を撫でてもらうと心に深い安らぎを覚えたのか。
彼女はそのことがずっと気になっていたのだ。
（まるで魔法みたいと思っていたけれど、本当に魔法のような仕組みだったのね）
あれから彼女は、一日に一度、ティータイムの時間に、アルファルドに頭を撫でてもらっている。
さすがに毎日は申し訳ないと思ったのだが、彼が「どうぞ」と言ってくれるので、つい甘えさせてもらっていた。
そのたびに、シルヴィアは心から驚いた。
朝から文官と議論尽くしで疲労していても。迫る父との対面に緊張していても。アルファルドの腕に包まれ、頭を撫でてもらった途端、ふわっと真綿で包み込まれたように、全身が軽くなってし

まう。
最初の頃シルヴィアは、アルファルドが未知の回復魔法に目覚めたのかとすら思った。
（色んな知識を身につけてきたけれど、私もまだまだね。こんなにも素敵な魔力の秘密を、今日まで知らずにいたのだもの）
頬に手を当てて、シルヴィアはしみじみと魔力の奥深さを噛みしめる。
そんなシルヴィアをきょとんと眺めていたロザリーは、突然、彼女を後ろからぎゅっと抱きしめた。
「難しいことはわからないですが……失礼して、ぎゅっ！」
「どうしたの、ロザリー？」
「私からお嬢さまに、元気のおすそわけです」
ぎゅむぎゅむと抱きしめるロザリーに、シルヴィアはふふっと笑みを零した。
「ありがとう、ロザリー。あなたのおかげで元気が出たわ」
「ロザリーはいつでもお嬢さまの味方ですからね」
「ええ。覚えておくわ」
そう言って、シルヴィアとロザリーは鏡越しに笑い合った。

さて。水色のサマードレスに着替えたシルヴィアは食堂に向かった。
ロザリーはきっと、これから父と対面するシルヴィアを励ます意味で、抱きしめてくれたのだろう。
その優しさがシルヴィアを勇気づけてくれる。
（だけど、アルファルドに抱き寄せられた時とは、少し違う気がしたかも？）
ほっとしたのも、元気がでたのも同じだ。
だけどなにかが――心がふわふわと浮き立つような感じに、少し違いがある気がする。
この違いはなにから生じるのだろう。
オキシトシンにも色々種類があるのだろうか。
そんなことを考えながら歩いていくと、食堂の入り口でアルファルドが待つのが見えた。
「お待ちしておりました、お嬢さま」
シルヴィアに気付いた彼が、胸に手を当てて頭を下げた。
今日の彼も、使用人用の黒い仕着せを身に纏っている。
実は父もシルヴィアも、アルファルドには自由に服を選んで着ていいと伝えている。だが、彼自身が好んで仕着せを纏っているのだ。
とはいえ学園に戻れば、アルファルドのこの姿ともしばしお別れだ。
「お父さまは？」
「すでに席についておられますよ」
「アルも一緒に席についてくれたらいいのに」
「勘弁してください。私にとって旦那さまは雲の上の存在ですよ」

「私だってそうだわ。ちゃんと味がわかるといいのだけれど」
冗談めかして溜息をつくシルヴィアに、アルファルドが優しく目を細める。
扉を開けようと背を向けた彼に、シルヴィアはふと思いついて、その背中にそっと寄り添ってみた。
「お嬢さま、さすがにここでは……」
「ごめんなさい。だけど、少しだけ勇気をもらいたくて」
扉にかけた手を止めて、アルファルドが珍しく焦った声を出す。それに詫びながら、シルヴィアはそっと目を閉じた。
――やっぱりだ。アルファルドに触れると、幸せが全身に染みわたると同時に、そこはかとなく甘酸っぱい疼きが胸をくすぐる。
アルファルドだけの特別な効果だ。
この感情がどこから生まれるのか、シルヴィアは知らない。
なのに、無性に味わいたくなる。
「……これも、オキシトシンの効果なのかしら？」
「なんです、それは？」
「幸せ魔力物質よ。親しい相手とのスキンシップで生まれるの」
「はあ……」
アルファルドはなにか言いたそうな顔をしたが、ふいと視線を逸らして、シルヴィアの気が済むまで好きにさせてくれた。
その目元にわずかに朱が差していたことに、本人もシルヴィアも気付かない。
やがてシルヴィアが離れたのを見計らって、アルファルドは今度こそ扉を開けた。
「――息災にしていたか、シルヴィア」
食堂の長いテーブルの最奥に、父エイワスはいた。
シルヴィアと同じ純白の髪に、理知的な深い紫色の瞳。王族と並んでも見劣りしないほどに整った容姿をしているが、表情に笑みはなく、冷たい印象を与える。
父と視線が交わった途端、ロザリーにもらった元気も、アルファルドに分けてもらった勇気も一瞬で溶けてなくなりそうになる。そんな自分を内心叱りつけて、シルヴィアは父とは反対側の席に座った。
「お父さまもお元気そうで安心しました」
「不在にしている間、なにか不都合はなかったか」
「問題ありませんわ。詳しくは日誌に残しましたが、文官の皆さんが手を貸してくださったので、諸々つつがなく済ませております」
「……そうか。ならば良い」
「……視察はいかがでしたか？　途中、嵐があったかと思いますが」
「特に。普段とそう変わりなかった」
「そう、でしたか」

途方にくれたようなシルヴィアの声を最後に、会話が途切れた。
前菜の冷たい野菜のテリーヌをなんとか呑み込みながら、彼女は気まずい沈黙に耐えた。
父とはもう何年も親子らしい会話をしていない。今日はこれでも、領地経営という共通の話題があったからマシなほうだ。
（……お父さまはやはり、私に不満がおありなのかしら）
そう思った途端、胃がぐっと重くなるような心地がした。
それならばそうと、面と向かって言ってくれたらどんなに良かっただろう。
養子を取るだとか、後妻を迎えるだとかしてくれたら、まだわかりやすい。シルヴィアだって、父に思いっきり反発できる。
だけど現実として、エイワスはシルヴィアにはなにも語らない。
シルヴィアも怖くて、父の本心を尋ねることができない。
ただ息が詰まるような時間だけが、嫌になるほど流れていく。
カチャカチャと、互いのカトラリーの音が響く。
デザートの柑橘のソルベを食べ終わりそうになった頃、思い出したようにエイワスがスプーンを置いた。
「そういえば、いよいよ予言の日が近づいているようだ」
「は、はい！」
まさか父から新たに話題を振られると思わず、シルヴィアは椅子の上でびくんと背筋を伸ばした。

予言――それは前々代の王国筆頭魔術師エムリスが、百年前に残したものだ。
エムリスの予言によると、百年先、地上に魔界が接近する。それにより、王国に数多の悪魔が現界し、次々と災いが起きる。その一方で、救世の印を持つ、悪魔に対抗する力に目覚めた子供が現れ、ひとびとを救済するだろう――
その子供は、ひとびとから『救世の子』と呼ばれている。
傍らのワインが入ったグラスを揺らして、エイワスは紫の目を細めた。
「森を抜ける時、いつもより魔力の揺らぎが不安定で、木々がざわついていた。魔界が近づいて瘴気が生まれやすくなっているのだろう。学園周りも警戒が必要だ。ゆめゆめ、気を抜くなよ」
「かしこまりました」
そうして、父エイワスとの短くも長い会食が終わった。
席を立ったシルヴィアは、階段の踊り場に飾られた家族三人の肖像画を――その中で、幼き日のシルヴィアを膝に乗せて微笑む母ビビアンを見上げた。
（救世の子が、ついに印に選ばれるのね……）
エムリスの予言は数多くの魔術師により解析された。
その結果、魔界が近づくのが予言からちょうど百年の今年であることや、予言の子供が十五歳から十八歳の少女であること。救世の印がふさわしい少女を選んで浮かび上がり悪魔を退ける力を授ける、ということがわかっている。
ここ数年、王国は救世の子に選ばれうる少女を、王立学園に集めている。

かくいうシルヴィアも、父譲りの高い魔力と王立学園きっての才女と褒め称えられる能力の高さから、印に選ばれる有力候補だとされている。
幼い頃、何度も繰り返し母が読んでくれた、救世の子を題材とした絵本のことが脳裏に蘇る。
物語の中、印に選ばれて悪魔の魔の手から王国を救った少女は、その勇気と功績をひとびとから称賛されていた。
あの絵本はただの作り話だ。
それはわかっている。
でも。だとしても。
「……もし。もしも、私が救世の子に選ばれたら。お父さまは私を自慢の娘と思ってくださるかしら」
シルヴィアの呟きに、当然ながら、絵画の中で微笑む母は答えてはくれなかった。

＊　＊　＊

長期休暇が終わり、二年目の学園生活が始まった。
王立学園は王都ルカディアの郊外、ノーグの森と呼ばれる森の中に位置する。
王都から結ばれた一本道を辿っていくと、突如として森の中に巨大な白亜の城が現れる。それが王立学園だ。

王立学園に通う生徒の大半は、ローゼン王国の貴族の子供だ。
大商人の息子や著名な魔法研究者の娘といった準貴族に当たる家柄の子もいるが、親戚筋のどこかしらに貴族とつながりがある。
そういう意味で、学園は社交界の縮図だ。
当然、クロウリー辺境伯の娘であるシルヴィアは、自ずと学園内の序列の上位に君臨する。
「ごきげんよう」
「ごきげんよう、シルヴィアさま」
「シルヴィアさま。それにアルファルドさま。お会いできて嬉しゅうございますわ」
純白の髪をなびかせてシルヴィアが正面入り口への大通りを歩くと、あちこちで令嬢たちが膝を折って優雅に礼をする。シルヴィアの後ろに付き従うアルファルドにまで声をかける者がいるのだから、律義なものだ。
「ごきげんよう、皆さま。また後ほど、ゆっくりとお話をさせてください」
シルヴィアが軽く微笑むだけで、令嬢たちは歓声をあげ、令息たちは頬を染めて目を奪われる。
その美貌と血筋に留まらず、常に学年トップの優秀な成績を維持するシルヴィアは、誰もが憧れる高嶺の花だ。
（お嬢さまはやはりすごい方だ。粒ぞろいの学生が集う王立学園でも一際秀でて、ここまで尊敬と憧憬を集められるのだから）
だからこそ、アルファルドでさえも信じられなくなる。

（……皆は想像もつかないだろうな。このお嬢さまがあんなに甘えた姿を俺にだけ見せてくださるなど）

昨日のことを思い出した彼は、顔が緩んでしまわないように眉間に力を入れた。

新年度が始まる二日早く寮に着いたので、昨日は必要なものを王都で買い出しするなどしてゆっくりと過ごした。途中、カフェに入って休憩したのだが、その時のシルヴィアもとんでもなく可愛らしかったのだ。

〝アルのジェラート、チョコレート味だったかしら〟

テラス席の向かいに座るシルヴィアがアルファルドの手元を興味津々に見ながらそんなことを口にした。

甘味好きの彼女が味見をしたがるのは珍しいことではない。

ジェラートを掬う手を止め、アルファルドはガラスの器を差し出して微笑んだ。

〝ミルクチョコ味です。召し上がってみますか？〟

〝いただきたいわ〟

薄水色の瞳をきらきらと輝かせて、シルヴィアが頷く。

アルファルドはいつも通り、器ごと渡すつもりだった。だけど、シルヴィアが普段と異なる行動に出た。

〝……あーん〟

目を伏せて恥じらいながら、薄紅色の唇を控えめに開く。

その光景を正面でもろに浴びた彼は、全身を雷に貫かれたような衝撃を受けた。

（こ、これは……俗に言う、『あーん』というやつか⁉）

実物を見るのは初めてだが、知識としては知っている。

元来は、親や乳母が幼子に食事を与えるための補助的な行動だ。

だが、両者が子供でないのなら、気の置けない間柄で行われる親愛の情を示した行為になる。

つまりこれは、シルヴィアがアルファルドを信頼しているという証だ。ならば従者として、彼女の期待に全力で応えなければならない。

〝あ……あーん〟

ぎこちなく復唱しつつ、アルファルドはスプーンでジェラートを掬い、慎重にシルヴィアの口元に運ぶ。

彼女の小さな口にスプーンが到達し、ゆっくりと唇が閉じる。

シルヴィアがこくりと嚥下をして、細い指でそっと口元をなぞった瞬間、アルファルドは無意識に息を呑んでしまった。

固唾をのんで見守る彼の前で、シルヴィアは頬に手を当てて微笑んだ。

〝美味しい……っ〟

〝……っ！〟

幸せそうにはにかむ彼女の、純真無垢な愛らしさたるや！

（あやうく、この街のジェラートというジェラートを買い占め、お嬢さまのお口に運んでさしあげ

てしまうところだった……）
「どうしたの、アルファルド？　あなたのほうから、今、とっても苦しそうな呻き声が聞こえた気がするのだけれど」
「失礼いたしました。太陽の眩しさに、目を灼かれてしまいそうになりました」
「そう……？　太陽を直接見てはダメよ。気を付けてね」
不思議そうに振り返ったシルヴィアに適当に言い訳をしつつ、アルファルドはきゅうと締め付けられている胸を笑顔で押さえた。
以前のシルヴィアは、アルファルドが相手だろうと、決して隙を見せはしなかった。その彼女が、ここ最近になって少しずつアルファルドに甘えるようになった。
きっかけは、どう考えても、初めてシルヴィアの頭を撫でたあの日だ。
（お嬢さまはこれまで、クロウリー家の次期当主としてふさわしくあろうと、常に自分を厳しく律してこられた。その分、本人も気付かないうちに、心の安らぎを求めていたのだろう）
その隠れた欲求を、図らずも自分が暴いた。だから彼女は、アルファルドにだけ素直に甘えるのだ。
まずいことに、彼はこのことに背徳的な喜びを感じてしまっている。
（……俺がお嬢さまを甘やかすのは、お嬢さまのお心から少しでも憂いを取りのぞき、お嬢さまを破滅の未来から遠ざけるためだ。断じて、お嬢さまの無垢な笑顔を独占して喜ぶためではない！）
とはいえ、シルヴィアの素の姿を易々と周囲に広げるわけにいかないのも事実だ。

クロウリー家の親戚は学園にもいて、シルヴィアが次期当主の座から転がり落ちるのを虎視眈々と狙っている。
彼らを牽制するためにも、完璧で非の打ち所がないシルヴィアのイメージをいたずらに崩すのは得策ではない。
（そうだ。合理的な選択として、こんなにも素直で愛らしいお嬢さまの姿を周りに知られるわけにはいかない。もし、誰かに見られてしまった暁には……）
「なにかしら。今度はアルファルドから、とっても怖い殺気を感じたのだけれど」
「失礼いたしました。夏の終わりは虫が多く発生いたしますので。お嬢さまに群がる虫どもを、一匹一匹丁寧に潰すイメージトレーニングをしておりました」
「そう……？　がんばってね」
きょとんとしつつ、疑いなくシルヴィアは頷いた。

そうこうしているうちに、二人は大講堂に着いた。
これから始業式が行われるこの場所は、天井が高く窓にはステンドグラスがあしらわれ、学園内でも特に壮麗な造りをしている。
二年生は中段の列に席を割り振られている。
アルファルドとシルヴィアが適当に空いている席に腰掛けたその時、なにやら大講堂の外が騒がしくなった。

「まあ、ウィリアム殿下がいらしたわ！」
「ルイスさまもご一緒ですわね！」
「ひさしぶりだね。みんな元気にしてた？　それは良かった！」
きゃあきゃあとはしゃぐ女生徒らと、それに答える爽やかな男子生徒の声。それだけで、誰が現れたのかわざわざ顔を見なくてもわかる。
ほどなくして、十人ほどの女生徒に囲まれた二人の男子学生が大講堂に入ってくる。
思った通りの人物の、思った通りの登場に、アルファルドはいっそ感心した。
一人めの、柔らかな栗色の髪に明るい緑の瞳をした甘い顔立ちの男子生徒は、ローゼン王国第一王子のウィリアムだ。
隣の、艶めく黒髪に涼しげな紫の瞳の男子生徒は、魔術師団長の息子のルイス・バトラーである。
ウィリアムは諸事情により王位継承権を放棄済の王子だが、垂れ目が印象的な甘いルックスと王族とは思えないほどの人当たりの良さで、学園で絶大な人気を誇る。いつも一緒にいるルイスも大層な美形のため、二人はいつも注目の的だ。
目立つ二人の生徒のうち、ウィリアムがシルヴィアに気付いて手を上げた。
「おはよう。シルヴィア、アルファルドも！」
「おはようございます。ウィリアム殿下、ルイス」
シルヴィアも二人の動向を目で追っていたのか、声をかけられてすぐに立ち上がり、淑女の礼で答える。

立ち読みサンプルはここまで

対してウィリアムは、気さくに手を振りながら近づいてきた。
「隣、座ってもかまわない？」
「ええ。もちろんです」
「ありがとっ」
言うが早いか、ウィリアムがシルヴィアの隣に腰掛け、ルイスもそれに倣う。
それにより、ウィリアムたちを囲んでいた女子生徒たちがさあと散っていった。
皆、クロウリー辺境伯令嬢であるシルヴィアに遠慮して離れたのだ。
ウィリアム王子がシルヴィアを人除けに使うのは、もはや見慣れた光景だ。
とはいえ、シルヴィア第一主義のアルファルドとしては、見ていて気持ちのいいものではない。
そんな不満が滲み出てしまったのか、彼の視線に気付いたウィリアムがぱちりと器用にウィンクした。
「何だい、アルファルド。君、なにか僕に言いたげじゃない？」
「いえ。殿下が相変わらず、素晴らしく人望を集めておいでなので、思わず感じ入って眺めてしまいました」
「うわーい。アルファルドのその、笑顔の裏にたっぷり毒を込めてる感じ、なつかしくて涙が出ちゃうな。これぞ、学園に戻ってきたって感じ！」
けらけらと笑うウィリアムに、一番通路側のルイスが溜息をついた。
「ちょっと、ウィル。新学期早々、騒がしすぎ。今日から二年生になるのに、少しは落ち着きって